

齋宮絵馬 — 齋宮 —

むかしむかしのことです。

齋宮中町のはづれに絵馬殿が建てられ、人々の願いごとや感謝の気持ちをあらわす為に、板絵を^{ほうのう}奉納しました。

ある年の暮れのことです。

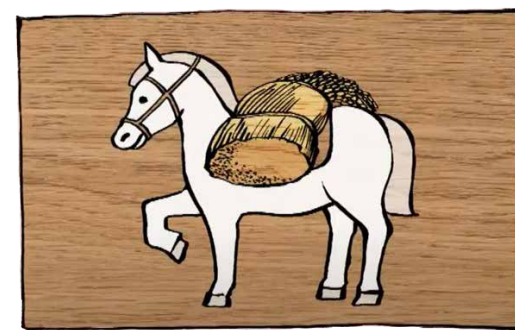
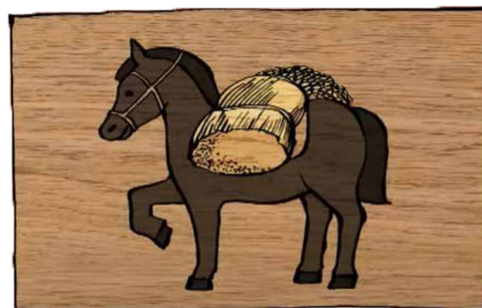
お百姓さんが、^{ひやくしやう}願いごとをかなえてくれたからと絵馬殿に大きな絵馬を奉納しました。

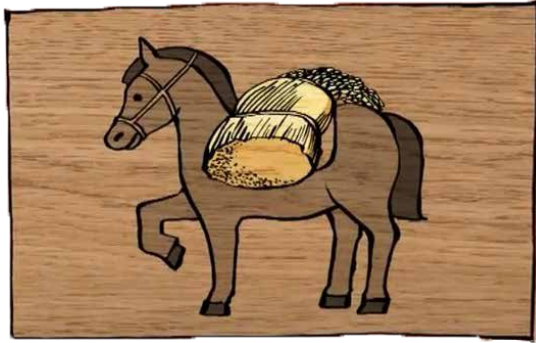
それには、^{ほうさく}豊作になるようにとまっ黒な馬に^{いなたば}稲束がどっさり背負っている姿が描かれてありました。

ところがその翌年、どうしたことが多雨大水で作物がさっぱりとれません。

このお百姓さん、それではということで、今度は白馬の絵馬を奉納しました。

すると翌年は、ひどい^{かんぱつ}旱魃にあいました。これでは、雨降らず日照らずで作物が育たないと、黒馬と白馬の絵馬を二つ掛けました。

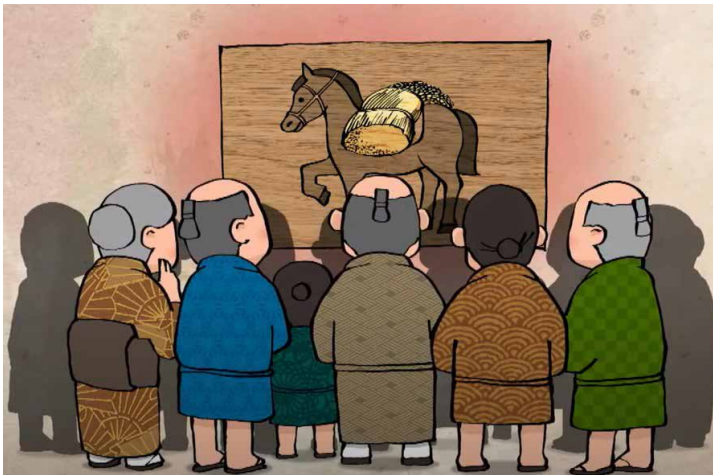




それからは、お百姓さんの願いがかなえられたのか雨も降り、太陽のめぐみも受けて、五穀満作ごこくまんさくが続きました。

そこでいつしか、お百姓さんの馬の絵柄によって翌年の豊凶ほうきょうを占なうようになりました。それは、馬の背負った稲束の色によって、早稲は何分、中稲は何分、晩稲は何分とあらわされました。

これを「斎宮の世だめし」と言われ、遠くは北勢、伊勢大和には広く知れわたり、参拝客が絶えなかったということです。



竹神社に保管されている絵馬
(レプリカ)

キーワード：みんわ、斎宮、絵馬、農業

このお話は、昭和56年に発行された書籍『明和のみんわ』（野田那智子さん編著）をもとにし、登場する人物・建物・その他の名称・読み方などは、原文をしようしています。